

佛乗寺檀信徒の皆さまへ

日蓮正宗 佛乗寺 住 職 笠原建道 講 頭 廣田正至

《雨の季節に、「素敵に煩惱を」》

梅雨に入りジメジメとした日が続いておりますが、檀信徒の皆さまには南無妙法蓮華經の御題目を唱えた功德で、涼やかな風を我が命に送りこみ、清々しく大法広布のために精進のことに尊く存じます。

梅雨の季節ですから当たり前なのですが、毎日のように降る雨を恨めしく思うこともあります。外出の予定があるときなどは尚更です。

雨の日、お寺の前を小学校に通う子供の様子を見ていますと、傘を手にして水たまりを選んで歩いている子がいると思えば、なるべく水の溜まっていない所を選んで歩く子もおります。その姿から、子供のころはどちらだったかな、などと考えながら、大聖人様が雨に因んでお詠みになられた次のお歌のことを思っております。

『三沢御房御返事』 (御書七六二頁)

「おのずからよこしまに降る雨はあらし 風こそ夜の窓をうつらめ」

【お歌の意を拝す】

この御文の前に、

「越後にて此の歌詠じ候ゆへ書き送り候なり」

とありますことから、佐渡から鎌倉にお帰りなる途中の、越後（新潟県）でお詠みになったものであることが明らかです。

配流の地・佐渡一谷を三月十三日に出発され、鎌倉に入られるのは三月二十六日です。春とはいえ北国の三月ですから、真冬ほどではなくとも寒さも厳しい二週間の道中です。幾日かは雨の日があったと思われます。

夜、宿でお休みになっているときに、閉めきった雨戸を打つ雨の音が部屋の中まで聞こえてきます。外は風が吹き荒れ雨音を大きくしている中でお読みになったのでしょうか。

「おのずから」は自分自身とか、みずからということです。次の「よこしまに」は横から、横の方向、横向き等の意です。

したがって、夜、宿で休んでいるときに、窓を打つ雨音を聞きながら思うことは、「夜になって窓を打つ音が聞こえるほどに強く、横なぐりに雨が降っているが、それは雨がみずからすすんでそのようにしているのではなく、強い風が吹いているからです。

これと同じように、私たち凡夫も、みずからがすすんで謗法を犯そうとは思っておりません。しかし、仏法の悪縁によって気づかない間に、いつの間にか謗法に馴染んでしまっているのです」と、私たちに誡めて下さるのです。

「夜」は時間的な夜の意味もありますが、私たち凡夫の迷いの姿を「夜」つまり「暗闇」の意味で用いられていると拝することができます。また、「まど」は「窓」と「惑」をかけていると拝することもできます。

「窓を打つ」と言っても、今日の窓と違います。木で作られた雨戸のことです。電気もない真っ暗な中で、強い雨音を聞きながら、闇夜を私たちの心に警え、夜明けが来ることを願う心持ちを表されているようにも拝します。

色々な解釈ができますが、ここでは「雨」を私たちの「仏種」、風を「煩惱」として拝してみます。私たちは生まれた時には、煩惱もなく素直な心で生まれてきますが、成長するに従って知恵も付きますが煩惱に汚されます。本来真っ直ぐに地上に降ってくる雨が、風によって横なぐりの雨になるように、素直で正直な心であれば易々と仏に成ることが叶うのですが、煩惱という風に吹かれて思わぬ方向に進んでしまい、折角の仏の種から芽を出すことが出来ない状況にある場合が少なくありません。

そのような姿を見て、皆仏に成ることが出来る可能性を秘めていることに気づかず、正しい仏道修行を忘れて、自己中心の生活に陥っていることを哀れんで詠まれたものであると思います。

幸いに、私どもは、多少の風に吹かれることはありましても、真っ直ぐに降る雨のように成仏という大地に到達することが出来ます。そのことに感謝することでさらに風に強い雨粒になることができる、とも思います。

《広宣流布の時に降る雨》

『如説修行抄』（御書・六七一）には、

「降る雨土塊を砕かず」

とのお言葉があります。これは広宣流布のときに降る雨は、土を砕くような強い雨ではな

く、穏やかで静かに大地を潤すものであり、洪水や土石流をともなうような雨は降らない、と正法流布の功德の姿を述べられたお言葉です。

本来の雨はこのようなものですが、「正報」である私たちの心が濁り惑い、正法を誹謗している故にその結果として、「依報」である自然環境も濁り惑い、多くの自然災害となって表れているのであると仏法は説きます。

同じ雨でも、土石流を引き起こすような雨もあれば、静かに大地を潤す雨もあります。その違いは、私たちの心による、と大聖人様が教えて下さるのです。自身の欲望が先になれば「悪しき煩惱」が生じて、自然災害を引き起こす豪雨に結びつきます。一方、仏様のお心を先にした「善き煩惱」であれば、大地を潤す恵みの雨となって表れるのです。

「煩惱」を無くすることは不可能です。しかし、「煩惱を覺りに変える」つまり「煩惱即菩提」が南無妙法蓮華經と唱え折伏をする功德です。短所を長所に、悪しき心を善き心に変えることが出来るのが日蓮大聖人様の折伏の信心であることを「雨」に因んだ御書から学ぶことができます。

先月も述べましたように、私たちは「善縁」に近づき「悪縁」から遠ざかることで、成仏の道が開かれます。善知識である御本尊様に近づき、成仏の実を収穫できるように修行に励んでまいりましょう。

まもなく梅雨も明け、夏本番を迎えます。地球温暖化の影響もあり、今年も暑い夏になることと思いますが、ご信心第一に進めば、必ず御本尊様の御加護を受けることができます。御本仏の御慈悲を信じて精進を重ねましょう。

《支部総登山》

佛乗寺の皆さまが、大御本尊様を一筋に思う心が通じ、心配された梅雨時にもかかわらず、暑くもなく寒くもない天候に恵まれた支部総登山でした。

二十数年ぶりに登山をされた方も初めての方も、一同に大御本尊様に御目通りが叶い、罪障消滅の大きな功德を受けることができました。

御開扉後には宝物殿で開催されている、日興上人と敬台院の記念展を見学しました。貴重な展示品の数々に、七百五十年の信仰と歴史を、改めて学ぶことができました。

登山部・青年部の皆さまを初め、車イスを押す方、先乗りして受付をする方等々、ご苦労様でした。皆さまの修行には、四条金吾殿に与えられた、

「然るを毎年度々の御参詣には、無始の罪障も定めて今生一世に消滅すべきか。弥はげむべし、はげむべし」

との御文を拝するまでもなく、大きな功德が備わります。日蓮大聖人様の元に足を運ぶ修行で受ける功德と、それを勧め支え、支部登山会を運営する功德を思います。

「現世安穩・後生善処」を確信し、次の支部総登山を目指そうではありませんか。

追 悼

浅草から毎月の御講に参詣されていた五十嵐和子さんが五月十五日に逝去されました。四月の御講にはお元気で参詣されておりましたので、お姉様の根橋美枝子さんからの電話に驚くと共に、最後まで御報恩のご信心に励まれた五十嵐さんのご信心を貴く感じました。お孫さん達に見守られての最後だったともお聞きしました。

お通夜が十九日、葬儀は二十日でした。昨年春に、病気が進んでいることをお聞きし、お見舞いと家庭訪問を兼ねてご自宅に伺ったのが、奇しくも五月二十日でした。この追悼文を書くにあたって、記録を調べていて気づいたのですが、丁度一年後に葬儀のお経になるとは。とても不思議に思います。

その時には、病院で受ける治療に対する不安や薬の副作用が心配なことを口にされておりました。医師の話では楽観できる状況ではない、ということも伺いました。

夜の勤行と唱題の後に、

『四条金御殿御返事』の

「なにの兵法よりも法華經の兵法をもちひ給ふべし」

(御書・一四〇七頁)

と一緒に拝したとき、五十嵐さんは

「どのような治療よりも、先ず御題目と折伏が大事なんですね」

と仰り、また、

「主人と結婚するときには、それこそ御題目を唱えました。御題目を唱えて御本尊様に決めて頂き今があります。だから今度も昔を思い出して御題目を唱えます」

と明るい顔で仰ったことを思い出します。その際に、

「法華經の兵法は、唱題と折伏ですよ」

と申し上げると、早速近所に住んでいる元学会員の森山さんという方に電話をして、自宅

にお呼びして勸誡を受けるように話をしたことも思い出されます。森山さんは未だに勸誡を受けておられないようですが、近いうちに法華講員となられることと信じます。

それからちょうど一年後に大聖人様のもとに旅立たれ、葬儀の後に仏乗寺で執り行った初七日法要において、御主人が勸誡を受けられました。五十嵐さんは命懸けで折伏をされたのだと思います。

また次の週には、五十嵐さんの義理のお兄さんにあたる安穩院法昇居士の七回忌が奉修されました。その時に、甥の大高さんとその子供さんが御授戒を受けました。

これは、五十嵐さんのお葬式の時、根橋克佳さんが同じ甥の立場で大高さんを折伏した結果です。これも五十嵐和子さんの葬儀が縁となっていることは申すまでもありません。これらのことから、亡くなった後に、大聖人様のお使いを立派に果たしているお姿が浮かび上がります。

元気なときにもっと折伏をしておけばよかった、と今頃大聖人様の前で仰っているかも知れません。そのように思うならば、来世は大聖人様のお使いとして、善き所に生を受け、自由自在に活躍されることと思います。平均余命よりも十数年先に来世に逝かれましたが、今世での使命を果たして行かれたことが、亡き後の折伏によって知れます。来世でのご精進をお祈り申し上げます。

ご家族や御姉弟の皆さまには寂しく辛いことと思いますが、今生での使命を果たしたことを信じ、来世での活躍を願って追善供養にお励み下さるよう念願いたします。

先日の支部登山では、新幹線でいつもご一緒なさっていた、柴田さんや高木さんも寂しくなったと思います。五十嵐和子さんの分まで元気で長生きをして、大聖人様のお使いをして下さることを御祈念申し上げます。

法名 和香院妙華大姉

俗名 五十嵐和子 享年七十二

平成二十七年五月十五日寂